島のおそうじ かあさん奮闘中
～ 灯を燈し続けて幾年月、さらにこれからも ～

男木島漁業協同組合女性部
河 原 久 美 子

1. 地域の概要

私たちの住む男木島は、高松市から北へ約 7.5km の瀬戸内海に浮かぶ周囲約 4.7km、人口 207 名（平成 20 年 4 月 1 日現在）の風光明媚な島である。島のシンボルは全国で 2 基しかない総御影石造りの男木島灯台で（写真 1）、映画「喜びも悲しみも幾年月」の舞台となった。

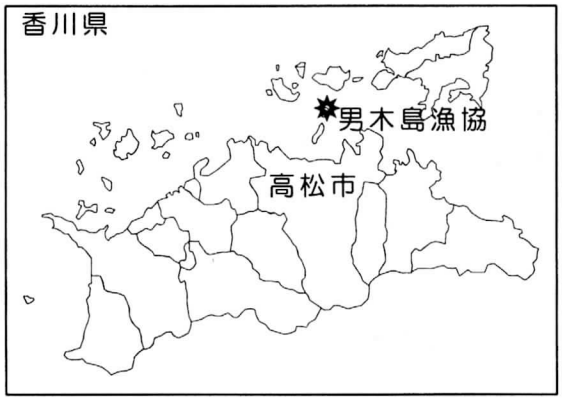

図 1　地域図

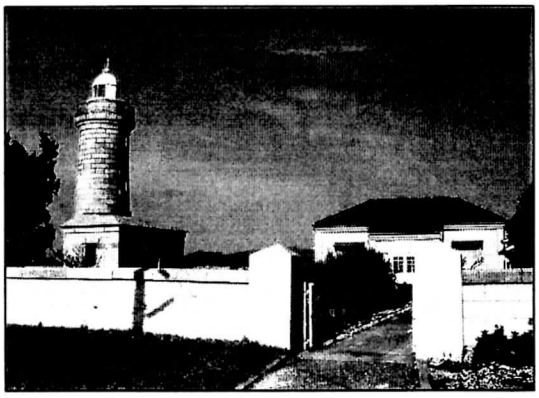

写真 1　男木島灯台

2. 漁業の概要

男木島漁協は正組合員 38 名、准組合員 40 名の計 78 名で構成されている。主な漁業は小型底びき網とタコつぼ縄、刺し網等の漁船漁業や素もぐり、ノリ養殖で、平成 19 年度の総水揚げ高は約 1 億 2,000 万円である。

3. 研究グループの組織と運営

私たち女性部は昭和 34 年 3 月に結成され、現在、部員は 26 名、うち役員は 6 名で活動している。

結成当初から、環境保全活動として天然石けんの使用推進や海浜清掃等を継続して行っている。また、部員の親睦を図るための手作りの忘年会やビアガーデンを開催して、銭太鼓等、日頃の練習の成果を披露し、楽しく活動してきた。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

活動に至った経緯の前に、私自身のことを少し紹介させてもらうと、私は男木島出身ですが、漁師に嫁いでから漁業に携わり始めた。漁協婦人部（現女性部）で活動を始めたのが昭和63年頃で、平成2年に役員となり、活動の企画、実行に積極的に取り組むことになった。そして、平成9年に部長に就任してから、今年で11年目になる。

女性部活動を始める以前から、漁具や廃材が雑然と置いてある漁港内の様子に嫌悪感を感じていた。部長に就任した当時でも、漁港のあちこちに漁具が野積みされ、廃材やら山のようなゴミで見栄えを悪くしたり、悪臭を放つほか漁港区域内での作業等に支障をきたしていた。

そこで、漁港区域内での作業効率化と環境美化、イメージアップを目的に、整理、清掃に取りかかることにした。

5. 研究・実践活動状況及び成果（効果）

1)漁港の整理、清掃、整備

島のイメージアップに向けて、まずは部員が話し合い、漁港の整理、清掃に向けて思いを一つに、実行に移し始めた。

一つ一つ、漁具や廃材が誰の物かを確認し、持ち主が分かった物は、整理するように依頼しながら、組合員の家を一軒一軒回った。

巡回し始めた頃は、「なぜ整理せないかんのか。」等と、小さい漁村が険悪な雰囲気になった。しかし、それでも船外作業の効率化や海の環境美化、整備の必要性や重要性から説得し、少しづつだが理解され始め、実行する人が増え、漁村がきれいになり始めた。

組合員の家を回っていくのは私たち女性部だけでなく、地域の問題として組合や高松市、保安部職員の指導や大きな協力を得て、行うことができた。

漁港区域内の整理は少しづつ前進し始めたので、さらに海の中の清掃も始めることにした。夫と共に、空き缶やビニール袋、タバコの吸殻等を回収し、水洗いしてから、家庭用ゴミ袋に入れて収集してもらった（写真2)。

回収も大事だが、まずはゴミを出さないことが大切、と操業中に出たゴミは小さい物でも持ち帰るようにした。ちなみに、捨てることが癖になっていた夫とは何度も何度もケンカしながら説明し、今では私がいなくても、ゴミは持ち帰ってくれるようになっている。

これらの活動の結果、平成12年に「高松市環境美化推進運動功労者」表彰を受賞することができた。この賞は、市が「私たちの町は私たちの手で」を合言葉に、清潔で美しいまちづくりの実現に向けて、日々、環境美化運動に率先して取り組んでいる市民や団体を表彰しているものである。この受賞が、整理、清掃の環境美化活動からさらなる新しい活動へと広げていこうという励みになった。また、平成14年には、地域住民が行う海岸の清掃活動

を県が支援している「さぬき瀬戸パートナーシップ」協定を締結し（写真 3）、年 3 回の清掃活動を行っている。

きれいになった漁港や組合の前には、高松市からいただいた花の苗を植えており、島民や観光客の目を楽しませながら、再びゴミが捨てられないように工夫している。

写真 2　清掃の様子（夫とともに）

写真 3　「さぬき瀬戸」パートナーシップ協定締結式

2)地域の活性化の試み

漁港の清掃活動を始めてから、部員の仲間意識や新しい活動への意欲が高まり、他の活動にも積極的に取り組み始めた。平成 10 年には、月に 1～2 回、先生を招き、銭太鼓の練習を始めた。部員だけでなく島民なら誰でも参加できるようにした。このことが、小さい島とはいえ、今まであまりつながりのなかった方と知り合い、コミュニケーションを深めるきっかけになった。

平成 12 年から 3 年間は、男木島小・中学校で子供たちと干しダコづくりを行った。女性部と青年部が講師となり、50～60 名に作り方を教えながら、交流を図った。タコには子供たちの名前を書いた札をつけ、天候を気にしながら 3 日間かけて完成させた。干しダコは、各家庭に持ち帰り、家族と共に焼いたり、タコ飯等にして、おいしく食べたそうだ。

他にも、平成 13 年から組合の前に特設テーブルを用意し、手作りのビアガーデンを催したり、男木島でとれた食材を活かした料理講習会を開催した。

平成 16 年 10 月には、天皇皇后両陛下もお見えになった「第 24 回全国豊かな海づくり大会」が香川県高松市で開催され、その中の漁船パレードでは私をはじめ、女性だけが乗った「かあちゃん船」から満面の笑みをたたえて大きくお手振りをした。パレードの最後尾から眺める景色は壮大な海のパノラマで、改めて誇らしく感じた。

景色にも増して感激したことは、かあちゃん船が両陛下の前を通りかかった際、特に、立ち上がってお手を振っていただけたことだった。漁師に嫁がなければ、このような貴重な経験はできなかったと感じている。

また、県が呼びかけ、県内の島々が連携して地域の活性化を目指す「さぬ

き瀬戸塾」にも参画した。視察や勉強会を開き、交流を深め、大会では「瀬戸の多島美」を全国に情報発信することができた（写真4）。

平成17年は、高松市で開催されたイベント「海と食の祭典」へも出展し、南京豆の五目煮や寒天の即売を行った。平成18年には、男木港の前にコミュニティセンターが完成し、料理講習会等を開催した。

写真4
第24回全国豊かな海づくり大会

写真5　メニュー説明の様子

さらに、平成18年から香川県等が、水産物の生産現場から調理・加工までを体験する「水産食育教室」を開催しており、現在までに延べ600名程度が参加している。以前、小・中学校で行った干しダコづくりの経験を活かし、平成20年11月、水産食育教室を男木島で開催することになった。

市の広報で公募した親子10組22名が参加し、（社）香川県水産振興協会と協力して、高松市屋島にある香川県水産試験場を見学後、県調査船で男木島に移動し、タコつぼ漁見学と干しダコづくりを体験してもらった。

料理は女性部が担当し、男木島の幸をふんだんに盛り込んだタコ飯、タコや野菜の天ぷら、南京豆の煮物、麦味噌汁、タコの麦味噌漬け等、タコ尽くしのメニューを用意した（写真5）。

参加者からは「おいしい」、「今日のメニューを家でも作ってみたい」と、うれしい声を聞くことができた。特に、男木島特産の手作り麦味噌を使ったタコの麦味噌漬けは「新たな男木島の特産品に」と加工を始めた商品で、多くの人に食べてもらうのは初めてだったので、心配していたが「おいしい」と言われ、励みになっている。

また、11月下旬に高松市で「姉妹城・親善都市および交流都市の観光と物産展」が開催され、干しダコを出展販売し、PRした。

6. 波及効果

これまで取り組んできた活動の波及効果として、一つは、島の環境美化と意識啓発ができたことである。みんなに説明するにはまずは自分たちから、と私たち自身、ゴミの持ち帰りを徹底している。また、毎月1回以上の清掃

活動と年2回の花植えと植え替えには、部員が積極的に参加してくれている。

二つ目は、清掃活動や銭太鼓等を通じて、今まであまりつながりのなかった人との交流の輪が広がったことだ。輪と共に活動も広がり、今年からは、地区の婦人部長とコミュニティの企画部長を務めることになった。責任重大で大変なこともあるけれど、さらに輪を広げ、地域との絆を深めることにより、さらなる活動に取り組んでいけると私自身、楽しみにしている。

7. 今後の活動計画

1)環境美化意識の向上

活動を進める中で、新たな課題として、地域主体の環境美化意識の向上と自主的な活動の定着を図っていく必要性を感じている。

清掃活動を始めた時と比べると、確実に漁港や地域はきれいになった。しかし、時々塗料の空き缶等が転がっていたり、台風等で港にゴミがたまると「早く掃除してきれいにしてくれ」と、わざわざ部員に連絡してくる島民が出てきた。「なにか勘違いしていませんか」と聞きたくなるような島民の意識そのものに、今までは気づかなかった問題があると感じている。

今後さらに、交流の輪を広げ、島全体が、島民全体が、環境美化の意識を向上させることができれば、と思っている。

2)地域活性化の試み

活動を通して得ることができた交流の輪、地域との絆を大切にしながら、島の原風景をイメージし、思い出しながら味わえる島の特産品づくりを行い、島の活性化へとつなげていきたい。

活性化に向けて、大きなチャンスも訪れている。

平成 22（2010）年、瀬戸内海の島々の歴史や文化を活かす「瀬戸内国際芸術祭」が開催されることになり、会場に男木島も選ばれているのだ。今まで島内では加工品を販売する場所がなかったが、芸術祭開催に向けて、直売所を含めた施設の建設が決定した。観光客の皆さんが来られた時に、芸術、文化、風景をゆっくり楽しんだ後、思い出と共に島の特産品も持って帰ってもらえるようになるのでは、と期待している。

最後に、女性部の歩みと地道な活動と共に、島の活性化につないでいけたら、その達成したときの島民全体の笑顔を思い浮かべ、心の活力にして、がんばります。